

大陸（北支）

私の戦記

山梨県 日原 国雄

入営を前にして

昭和十六（一九四一）年春、徴兵検査に合格した私は、同年八月一日会社に出張を命ぜられ、満州は小興安嶺の神樹と言う所で林業指導員として約三カ月間勤務してまいりました。

現地従業員は満州原住民が多く、その中に現地採用の通訳二人がおりました。最初は言葉が解らないので困りましたが、少し馴れて来ると片言でも冗談が通ずるようになり、帰る頃には買物ぐらいいは何とか買えるようになりました。

昭和十六年十一月二日、帰宅。翌日の新聞には清津川新潟連絡船「企比丸」が日本海上にてソ連の機雷に触れ沈没し、山梨県人も三人行方不明と出ていました。私は「この船に乗っていたら」と思うとぞっとしました。

御国に捧げるこの身体、何で粗末にできるものかと思いました。先輩達の話聞いて、元来た道を帰って来たから無事帰れたのだと心の中で感謝しました。

大東亜戦争始まる

昭和十六年十二月八日、日本は米国に宣戦布告と同時に、米国太平洋艦隊基地ハワイを奇襲攻撃し、これに壊滅的打撃を与えました。

入 營

昭和十七年二月五日、待ちに待った入營です。

入營地は東京都赤坂の赤煉瓦作りで有名な、五・一五事件、のあった反乱部隊であった、部隊名「東都六二部隊片岡隊」へ入隊しました。

入隊と言っても集合しただけで、二月十五日には宇品港から輸送船「金剛丸」で朝鮮の釜山へ向かいました。私は約七カ月の間に三回も同じ船に乗ったことになり、何だか、奇跡的なような気がしました。

釜山より列車に乗り、朝鮮を縦断、満州に入り、山海関・天津を経て津浦線を南下、甫口で船に乗り替え南京城に向かいました。南京では当時有名だった南京城一番乗りをした脇坂部隊の脇坂門の上にて、当時の戦闘状況の説明を受け、中山路を歩き孫文陵に詣り、再び乗船して揚子江（長江）を西に向かいました。船に乗って初めて任地は「漢口」であると云うことを知りました。船で五日掛かり任地に着きました。

船の中では何も用はないし、内地からお金も持って来たので皆と相談し、ボーイを呼んで玉子やパン、菓子をよく買ってやりました。古い兵隊にはみんな話合つて内々でやりましたが、所詮しょせんは全部わかっていたそうでした。

漢口に着いてすぐ班編成をし、部隊名も知らされました。正式の名前は「独立混成第九旅団第三十六大隊第四中隊」でありました。

ここで、初年兵教育を受けました。中山公園で毎日教練を受け、帰隊する時は街中を避け田園の中の道を通りながら、良く軍歌を歌いながら帰りました。

私達は表面は長沙作戦の後方警備と言うことだそうでしたが、教育を受けているだけで余り戦地へ来たと言ふ実感は正直のところ有りませんでした。

漢口に約二カ月半駐在し、軍は北支に転進とのことで、私達は、またもと来た通りを引き返して、

今度は石徳線沿いに進駐しました。冀中作戦参加で大隊本部は深県にあり、私達初年兵は深県の大隊本部で教育を受けました。

八月一日付で一等兵となる。中隊本部は辛時鎮という所にあり、私はしばらく同年兵三人ぐらゐと一緒に分遣隊に出されましたが、まもなく中隊復帰、十月一日付で功績係の近藤曹長の当番兵を命ぜられ、昭和十八年二月一日、陸軍上等兵となり。中隊長・西田中尉の当番兵を拝命しました。同年五月、初年兵重機関銃教育係となり、石徳線衡水において同任務に服しました。

衡水駅は津浦線、徳県と京漢線、石家莊の中間の要衝であり、大隊本部が置かれていた所です。

同年八月一日、陸軍兵長となり、部隊長長谷川吉哉大佐の当番兵となり滄県に移る。この頃旅団本部は天津にあり、よく命令受領に出張しました。

天津には各国の租界があり、フランス租界が一番賑わっていました。また建物も立派であった。部隊長は営外居住だったので、私達も一緒に営外

居住となったのです。副官は有名な北支派遣軍の歌を作詞した千田少尉です。当番兵は同年兵の鹿野一等兵と部隊長の食事・身のまわり一切をする。古年兵の佐藤上等兵と私は主に大隊本部及び対外関係の連絡に当たっていました。

任期中、討伐作戦があり、部隊長も出動されたが、宿舎の用意、馬の手入、食糧の調達には特に神経を使いました。また忘れもしない、昭和十九年一月一日は戦野の中で本部付の各中隊も全員集合し、はるか東方に向かい、部隊長の号令で捧げ銃をし、祖国日本の必勝を祈った時は生まれて初めて身のひきしまる思いがしました。朔風吹く荒野での宮城遥拝でした。

作戦も終わり、やれやれと思う間もなく中隊復帰となり、部隊長は江田少佐に替わり、間もなく河南作戦へ参加することになりました。

三月下旬、出発することとなり、私は重機関銃隊の第一分隊長として編成されておりましたとこ

ろ、急に編成を解かれ、北京の方面軍に転属とのことでした。話を聞いて見ると「君は支那語が話せると言うことは初年兵当時からわかっていた。今度、方面軍に行くのはその支那語を勉強し、他に通訳としての教育を受けるために行くのである」ということでした。

「実のところ、今の朝鮮の通訳では駄目だ、情報が入らなく入らないのだ。いずれ原隊へ復帰して活躍してもらわなければならないのだ」と准尉殿に言われ、しかし、戦友と別れるのは辛い思いでした。

昭和十九年四月一日、北京にて方面軍参謀部第二課所属の華語教育隊初等科に入りました。毎日八時間の特訓教育、その上赤痢が流行し、入隊した者の中でも羅病者が大分出ました。私の同年兵も羅り隔離病棟へ移されました。

九月、初等科の教育が終わり、半数は原部隊復帰し、半数が高等科に進み、私も残りました。こ

の残った約百五十人と太原から来た百五十人、計三百人が高等科で、さらに特訓を受けました。講師の大部分は北京大学の中国人の先生でした。二カ月程すると一般人と同じ服装で、実習と称して朝から街に出て、現地人と話することを目的に聴き取りの勉強に入り、毎日北京の主要な所を歩き廻り会話に力を入れました。

明けて昭和二十年三月、高等科の課程を終了した私は、今度は専修科へ残されました。この専修科には全部で四十人が残されました。そして今度は万寿山の麓の燕京大学の分院に移され、ここでは大本営から来た小関少佐とか、国文学博士の藤波国途先生や、方面軍から来た参謀の方々より、現在の戦況について説明を受け、更なる国体の高揚についての講義を聞き、「最後の防衛は北支軍に在り」を自覚し、毎日を真剣に取り組んでまいりました。

そうは言っても、万寿山がすぐ近くにありまし

たので、日曜日にはよく遊びに行きました。天下第一泉のこんこんと湧く清らかな水、その清水を貯めて造った昆明湖、その上に浮かべた大きな石船、望泉閣、どれも中国ならではの逸物で、私達は特別に中へ入って見ることができました。

分院にること二カ月半、専修科は閉鎖となり、四十人の特訓生は二十人が原隊へ帰り、残り半分の二十人は済南市に新設された第四十三軍に転属を命ぜられました。慌しい出発で、司令部へも寄らずに北京をあとに済南に向かいました。

済南に到着しましたが宿舍も決まっていなため、取り敢えず偕行社の二階に旅装をとくことにしました。七月に入り、ようやく落ち着く所が決まり、済南市四大馬路小緯五路に元米国人の経営していた自動車会社の事務所に行くことになりました。軍司令部とは少し離れていましたが、庭のある立派な建物でありました。

早速、軍司令部に至り着任の申告をしました。

軍司令部は元独逸領事館の前にありました。軍司令官・細川中将、参謀長・寒川大佐、高級副官・神保信彦中佐、主任参謀・鈴木少佐でした。

私達は参謀部第二課に配属され、鈴木参謀の指揮下に入り、済魯荘公館勤務を命ぜられました。館長は高島大尉、他に将校二人、当番兵一人がいました。また直接指揮は受けませんでしたが、山東省保安隊総司令部の顧問をしておられた田部井中尉がおられました。

着任早々、膠済線維県の北に当たる所に惠民と言う県都がありました。その保安司令「竜佩沈」が公用で済南に来ている留守に、中央軍の攻撃を受けているとのことで、竜佩沈と共に保安隊に協力して出動しました。周村に一泊して翌日惠民に入ったのですが、敵は既に引き揚げた後でした。帰りに保安隊の望楼がやられ、橋が落とされていたので、途中から徒歩で帰ってきました。

保安隊は攻撃されましたが、我々には被害はあ

りませんでした。第四十三軍に来て小休止をする間もなく終戦となり、軍司令官は戦犯容疑で捕り、参謀長が司令部にて指揮をとり、私達はただ命令に従って行動するのみでありました。

参謀部の対応は早かった。日本軍は蒋介石軍に對してのみ降伏条件を履行し、その他は一切交渉の相手とせず、まず終戦の翌日、維県の山東保安司令・張景月の下へ大久保直夫氏を派遣しました。膠済沿線にいる日本軍とのトラブルを未然に防ぐためと、邦人への掠奪を防ぐための接渉に当たらせる重要任務をもった派遣であります。

張景月氏は張店維県地区では最大の軍閥であった。次いで三日目には益都の軍閥徐振中の部隊へ坂東敏一さんと私が別々に入りました。その他、松田太郎、山口、熊沢の諸兄は皆それぞれ政府系地方軍に入り、日本軍との連絡に当たり、邦人の保護に努めました。山口、熊沢は後日、地方に駐在していた日本軍と共に引き揚げたとのことでした。

当時、済南を中心として山東省全域に拠点を持つていた我が軍は、奥地の部隊を速やかに膠済沿線に集結させ、沿線に散在していた政府系地方軍との間で外部から攻撃して来る共産軍へ対応すべく工作を開始しました。その連絡員として我々が入ったのです。これは大成功でした。済南では引揚者から「物を掠られたことはあるが危害を加えられたことはない」と言われていました。

私の入った部隊は、九月に入り済南市に入城しました。当時の彼らの入城して来た状況を参考のために、少し書くことにします。

夏も終わらんとする九月初旬の済南は、ちょうど九州くらいの気候です。従って、兵士等は半袖の開襟シャツを着ていましたが、帽子も靴も破れ、背負っているのは柳の木で編んだ折りたゝみの背のうに綿入れの寝ぶとんを一枚背負っているだけ、顔も手も、日焼けして真黒、ただ目だけは入城の興奮のせいか異様に輝いていました。比較的老人

は少なく、十七・八歳の少年が多かったのには驚きました。こんな姿で入城して来るとはと思うと何だか可愛想になりました。そして良くぞこゝまで日本軍に抵抗して来たものだと、反って賛辞を送ってやりたかったものです。自分が置かれている敗戦国の軍人であると言うことも忘れて泣けて来ました。

国民党側も省政府の対応が早かった。季延年と言う元主席が返り咲き、山東警備司令には張景月が、また濟南防守司令には徐振中がそれぞれ任命され、私は城内へ移りました。各種の接收工作は順調に進んでいました。

九月に入ると沿線各地から、着のみ着のまゝで引き揚げて来た邦人は住むに家なく食う物もないと言う状態で、軍の糧秣を放出して何とか飢えをしのぐことができました。

濟南駅の鉄道線路上には天幕の村ができました。私は徐振中・防守司令の命を得て市中巡察隊に加えてもらいました。そして特に日本人の住んでい

る街は入念に巡察しました。歩くと言っても乗馬でするから疲れるようなことはありません。毎日帰ると副官所で所長に報告を致しました。この頃、大久保さんも坂東さんも一応の任務を終わり濟魯荘に帰っていました。

昭和二十二年二月、濟魯荘の同志は高島大尉と私を残して引き揚げて行きました。私はちようど濟南の一つ先の黄台駅に行っておりましたが、同志諸君が帰ると言うので急遽、濟南の駅で見送りました。濟魯荘は引き揚げとなり、軍司令部も近い内に閉鎖すること。

私も今後の身の寄り所について鈴木参謀にお伺いしました。参謀は「君の意志にもよるが、今、軍としては邦人の帰還に対してできるだけ早く無事帰すことのみ考えているので、今後残留する邦人のことまで考えることはできない。できれば君のような人が残ってくれて邦人の為に協力してくれれば有難い」と言っていました。私はどうせ捨

てた命、国に捧げた命だ、多くの邦人が軍を頼りにどんな奥地へも入り商売をしたり、軍需品を蒐集したり、皆一所懸命働いて来て、敗けたら身体一つにされ、軍は邦人を置いて帰ってしまう。そんな現状を見て「よし俺一人でも邦人の引き揚げに、これからも尽くせる限り頑張つて見よう」とその旨鈴木参謀に話したところ、参謀も「有難とう、ともかく体につけて頑張つてくれるように」と励まされました。

寒風吹く中、幼い子供の手を引き、背には何がしかの飴菓子やリュックサックにつめたのだろう。それを背負わせ、母親は背負えるだけの物を背負い、片手に袋いっぱい物の下げ、片手で幼い子供の手を引いて梯団を組んで引き揚げて行きました。こんな姿、こんな光景を毎日のように見ながら「あゝこの人達が途中で村の人達に襲われはしないか。物を掠られはしないか、無事青島へ着けるのか」と、不安の毎日の中に邦人の無事生還を

祈るだけでした。

そんなある日、例により市内の巡察をして久しぶりに十二大馬路の方まで足を延ばして行ったところ、そこに日僑戦犯収容所がありました。所長は徐振中司令の第三弟であつたので、すぐ打ちとけ話もできました。収容されている人の名前を聞いたら名簿を見せてくれました。それを見て私は内心これは大変なことになったと思いました。

高級副官・神保信彦中佐と主任参謀・鈴木少佐が入っているではないか。私は副官所の寝室で救出作戦を考えていたのである。

この時の私が、お二人を救い出すお手伝いをした記事は、文藝春秋別冊号に掲載されましたので、左にそれを記載します。私に関係した分のみ抜粋しました。

文藝春秋・別冊 第二〇六号

運命の「きずな」はフィリッピンを救った日本

陸軍中佐神保信彦。

銃殺寸前の命を救われた男（ロハス氏）が大統領となつて、処刑寸前の恩人を助け出す。

運命のきずな 伊藤桂一

入獄中の神保中佐に対しその救命に天がいかに配剤したのかを、今一つの例があるので記しておきたい。

これは済南で神保中佐の部下であった日原国雄氏が、昭和五十七年八月、神保中佐の隆子未亡人に宛てて出した手紙である。神保中佐の入獄時の劇のないきさつがよくわかる。

『突然の書状にて失礼いたします。』

今日「原爆記念日」を迎えるに当たり多くの犠牲者の命を弔うと共に神保さんの御冥福をお祈り申し上げます。

私は神保さんが終戦当時中国山東省済南にて第四十三軍高級副官をしておられた時、参謀部に勤務していた者です。終戦後私達の上司鈴木参謀と

共に戦犯収容所に入っていたのを救出するお手伝いをしました。

くしくも原爆記念日に三十七年前を想起し、このような想い出を書くことができ、感無量でございます。

終戦当時、私は済魯荘公館勤務をしていましたが、軍命により中国軍に派遣され、済南防衛司令部副官所付となり済南市の治安維持の為に市中警備に当たっていました。

たまたま戦犯収容所巡視の際お二人が捕らわれたの身となっていることを知り、何とか救出の方法がないものかと思案しましたが、監視がきびしく近づくこともできませんでした。しかし何回か巡視しているうちに、収容所員と仲よくなりました。そこで「せめて外部に連絡することがあったら書いておきましょう」と紙きれと短い鉛筆を警備員にわからないように渡し、翌日食物を差入の際手紙をしたゝめた紙片を受取り、四十三軍司令部残留者の詰所へ持参いたしました。

その時神保さんから受けとった紙きれを誰に渡したか記憶がありませんでしたが、はからずも昭和五十七年五月十六日、九州雲仙に済魯莊勤務当時の人達が九人集まりました。その中に私達の上司で軍司令部最後の引揚げまで済南におられた高島大尉が来ておられた。挨拶に立った同氏が型通りの挨拶の後「日原君にはご苦労をかけたが、帰れてよかった。われわれはもう君は帰って来れないと思っていた。今だから話すが神保さんと鈴木さんを助け出したのは君だよ。君が収容所から神保さんの手紙を持って来た時は、「神保さんも、いよいよ頭がおかしくなったのではないか、といていた。だってそうだろう、昨日まで敵の將軍、フィリップンの大統領に宛てて助命嘆願をしてくれというのだから」と一笑に付していた。

ところが誰言うことなく神保さんが比島作戦に参加したこと、クリスチャンであること、そういうことから、もしや、ということになり、英訳してロハス大統領宛に郵送したところ、大統領より

蒋介石総統に国際電話にて助命願いが要請され、直ちに釈放されたが、全く奇跡的に助かった。と言うよりほかはない。それにしても「情は人の為ならずだよ」と私の行為を認めてくれました。

私はほんとうに嬉しかった。自分が戦後三年間も大陸に残っていたことが無駄でなかったことが証明されたからです。神保さんはクリスチャンで比島作戦の時ロハス大統領を助けたことは済南でお聞きしていました。

出所された時はたしかあごひげを生やし、だるまさんのようなお顔だったと記憶しています。鈴木さんが出られましたが、これも神保さんのお力だったと思います。なお同収容所には多くの方が入っておりましたが、その中で余り取り調べも受けず処刑された人達も何人かおりました。宗教心が厚く、人道的に生きた人にはよく恵みがくるものだ、と言うことをこの手紙は教えてくれているようです。』

記事はここで終わっていますが、ついでにこの収容所に入った人の中では、楽園公館の城山少尉、濟南捕虜収容所の青井中尉、維県の憲兵分隊長の吉田曹長等は後日処刑されました。

翌日巡視の途中で処刑された島へ行ってみましたが、喰いちぎられた血のついた服片が散ばっているばかりでした。立場の違う私は手を合わせることもできませんでしたが、心の中ではご冥福を祈って来ました。

また何人かの知っている邦人も出所の手助けをして帰国させていました。

昭和二十三年三月十日、この日は日本とロシアで戦って（日露戦争）、日本陸軍が満州の奉天（瀋陽）で大勝利を飾った日でした。子供の頃は紙の小旗を振りながら祝って歩いたことを思い出し、今の自分の置かれている状況が情けなくなりました。

この頃は邦人も軍もほとんど引き揚げを終わりに、

中央軍と共産軍の自国民同志の争いとなり、共産軍は村を掌握して、次は小都市を傘下に入れ、都市の攻略に出て来た時です。先にも記しましたが、周村は山東省でも五指に入る街で、しかも濟南防衛圏に入っていました。その周村が中央軍に包囲されていると言うので、濟南防守司令部でも相当数の部隊を救援のため出動させました。

私達副官所も出動を命ぜられ、途中まで車で、周村近くになって下車し、徒歩で周村に入城しましたが、城門は閉められ中に土嚢が盛られ物々しい警備でした。肝心の共産軍は濟南から救援隊が着く前に引き揚げていましたが、夕方ではあるし引き返すにも雨模様になったので、周村へ一泊して翌日帰営と言うことで同所に宿営しました。

その夜である、雨が強く降り出して来たその時、突然砲声が鳴り響いた。そのうちに銃声も聞こえるようになった、仲間の者が「夜襲だ、俺達と一緒にいて外へ出るな」と知らせてくれました。外は雨だ、時計は深夜一時を廻っていました。飛ん

で来る砲弾で建物が次々と破壊されてゆく。敵は照明弾を無数に打ち上げて、目標に向かって打っている。仲間は言った「中共軍は昼間に、城外のここに砲を据えて何分画で打てばどこに命中する、と言うことを研究してあるから、かなわない」と言っていました。

雨はますます強く降って来ました。夜が明け始めて来ました。敵の攻勢は遂に城壁に近付いて来ました。友軍の打った砲だろう、三百メートル位の所で破裂しました。聞いたら分画を○で砲身を水平にしたまゝ打ったそうだ。日本軍から接收をして訓練もしなくて出動して来たとのこと、これでは共産軍にも勝てるわけがない。

夜が明けた。共産軍は四方から城壁を登り、城内に進攻して来ました。私達は六十人ばかり、一室に入り門を閉めて外の様子を見ていました。間もなく若い中共軍の兵士が現われて「銃を捨て、出て来い。降伏すれば我々の同志だ。歓迎する」

と叫んでいました。見れば中共軍の兵士は皆二十歳位の若い者ばかり。服装も整っているし、兵器も一様に揃っている。動作も機敏に立廻っていました、私達は一応兵器を持っている者は全部戸外に放り出しました。

次に共産軍の兵士に連れられて城外に出ました。街を出た所で若い兵士が帽子をぬいで「皆さんに申し上げる、これから先は我が開放区へ入る。それにつけて皆さんが持っている貴重品を全部預かるので名前を書いて出さない」とのことです。

私も腕時計とお金を財布ごと預けた。中には金の指輪、金貨等を出した者もいました。私達はどうせ返してはくれないだろうと思っていました。行軍第二日目、約二万人の俘虜が二列になり渤海湾へ向かう、延々と行軍をしている様は実に見事なものでした。

行軍中に中央軍の戦闘機が来て誤射されたこともありました。五日間歩かされて李立村と言う所が終点と分かりました。この五日間、一番閉口し

たのは食糧が行き届かなくて一日に二個、ひえ飯の餅子を渡されただけ。仲間が畠から盗んで来た大根をかじったこともありました。

私達は約四十人の班に分かれて部屋に入りました。その中に、横島さんと言う軽機関銃の指導をしていた二人が入って来ましたが、この二人は中国語は余り話せなかつたので私の所で起居を共にしました。翌日からは食事は一応腹いっぱい食べることができました。また今日から頭の切り替え教育をさせられたのです。

私は毎日学習に行きましたが、あとの二人は出席しなくても良い、と言うことでした。ここで教育を受けてちようど三カ月、いよいよ済南に帰される日が近づいて来ました。

いよいよ卒業式である。式場は柳の大木の茂っている丘の上で、約百五十三人が一緒に整列しました。その時驚いたことは、古びた机の上には、俘虜になった時渡した時計やお金がそのままある

ではないか、係の者が一人ずつ名前を呼んで確認しながら渡している。

私は初めて目の前に見たこの光景を「日本の軍隊の討伐の時の掠奪三味の仕草と比べて、心から恥ずかしく感じた」と同時に、こんな立派な軍律正しい中共軍なら近い将来中国は統一されるだろうと思いました。

また、この際中国に留まる必要もなくなった今、やはり残っている者に、勧めて帰国すべきであると心に決めました。

式が始まった。中共軍の「方」と言う参謀長が演説の中で「今諸君に渡した貴重品は、我が中国共産党社会では不用の物だ。しかし諸君は再び資本主義社会へ帰るのには生活上必要な物である。いずれまた近いうちに来るであろうが、持つて行って使い給え」と言つて全部渡してくれました。

また、方参謀長は私に「日原君よ、君はこれから中国に止まる必要はない。それより早く帰つて日本の復興のために尽くすことだ。君らの先輩が

日本に帰っているから彼の下で働きなさい」と諭すように話してくれました。

式が終わって私達は、元来た道を済南に向かって帰って来ました。

昼食時になると各村で既に準備がしてあり、夜になると宿舍が割り当てられてあり、至れり尽くせりです。中共軍の警備兵は「戦争が始まったから、いつでも逃げて来い。銃を捨てて来れば、皆同志だ」と言っていました。

国民党軍の境界線まで来ると、示し合わせたように双方から白旗をかゝげて三人ずつ出て来て、対峙している。中央で何か話して別れて来たが、すぐ警備して来た兵士達は、「再見」「再見」と手を振りながら帰って行くのに答えて手を振りませんでした。

友達が望楼から手を振って迎えてくれている、すると皆一斉に駆け出して行った。中には中共軍へ悪口をいゝながら行ったのもいました。

生まれて初めての体験を三カ月して帰って来た私は、以前確保しておいた家に帰りました。それは同吉公司の古屋友重さんが住んでいる前の家である。私はそこに帰り、直ちに帰国準備をすると同時に、残留している人達に「済南は近いうちに必ず陥落する。巻き添えをくって死んだら元も子も無い」と懸命に勧めて廻りました。結果約八十人程帰国者がありました。あと残った人は八十人位おりましたが、種々事情がある人達でした。

八月初め、飛行機で青島を経りました。八月十二日「高砂丸」で、途中天津、タンクー、コロ島へ寄り引揚者を收容して八月二十二日舞鶴港に帰還しました。

最後に私の尊敬する神保中佐の遺稿の一節を紹介して終わります。

『好漢よ大志あれ　さらば汝は　鋭鋒を匿すべし』

【解説】

体験記執筆者は、昭和十七年二月、東京にて入隊、十五日には早くも宇品港より現地部隊に派遣され、入隊した。この入隊部隊は独立混成第九旅団（谷第四二〇一部隊）であった。

この独立混成第九旅団は独立歩兵大隊第三十六〇四十大隊より編成され、体験記執筆者は第三十六大隊（谷第四二〇二部隊）に配属となった。

独立混成第九旅団は、昭和十五年六月より、山西省の北西地区で第一軍担当の肅正作戦に参加、八月には第一期普中作戦に参加、一部は第十一軍に派遣されて、宜昌作戦に参加している。また中支にあつて、昭和十六年五月より中原作戦、九月には一部をもって沁河肅正作戦に参加させ、山西省中南部沁河沿岸地区の共産軍の撃破掃蕩作戦を行っている。

十一月には、第四師団が第十一軍から大本営直轄となり、上海に集結、その補填のため旅団主力は第十一軍指揮下で武漢地区の警備を担当することとなった。

同旅団は以後、対ゲリラ戦など現地の治安維持に協力していたが、体験記執筆者が現地の部隊に入隊した頃、即ち昭和十七年二月には、司令部を武昌に置き武漢地区の警備を強化、四月に第一軍から北支那方面軍に編入されて天津地区へ移動、同地区の警備を担当することとなった。

また、昭和十八年一月、第四十一師団が南方に転用されたことに伴つて、同師団の任務を継承して、司令部は徳県に移動した。また、第二十七師団の満州移駐に伴つて、天津特別市とその周辺の警備地区を継承している。昭和十九年の夏にかけて行われた大陸打通一号作戦に際しても後方の占領地区の警備を担当している。

このように同旅団は現地の警備、そして主要

師団の南方あるいは満州転用の後を受けて、北支、中支地区の警備を担当している。

このような中で、体験者は中国語の通訳養成のため、昭和十九年四月より北京の北支那方面軍参謀部第二課の華語教育隊高等科さらに専修課に入り、毎日八時間の教育を受けている。そして昭和二十年二月、青島方面の連合軍上陸に備えての第四十三軍の編成下令となり、旅団は一月以降、塘沽の海岸方面で築城、防衛強化を行いつつ担当地区の警備を行っている内に終戦を迎えている。

終戦後、体験記執筆者は、蒋介石軍との対応、日本軍の秩序維持、復員・帰国邦人の保護に力を注ぎ、九月には済南に入り、体験記には、さらにこれらの業務を推進しつつ、戦後の活躍が語られている。

そして筆者が語るように、文藝春秋に載った神保中佐の助命の経緯を掲載しているが、その

後の中共軍との交流があり、このような戦後の処理の労苦を重ねつつ、種々事情がある人達を伴い復員したのは、終戦三年後の昭和二十三年八月二十二日、舞鶴に上陸している。